地域を知ろう(48)　民話・伝説 No.28　和田の杉並能楽堂

和田の杉並能楽堂

杉並区にある能楽堂をご存じでしょうかブース記念病院の前を、中野の方へ十貫坂に出る手前の南側にあります。

年代を感じさせる建物は明治四十三年当時の渡辺銀行頭取であった渡辺勝三郎の後援で本郷弓町（今の本郷二丁目）に創建されたのが始まりで、和田に移ったのは昭和四年のことで、このあたり一帯はまだ雑木林の多い武蔵野の面影を残していたと能楽堂の方は当時を回想していました。その頃は山本能楽堂と呼ばれていたそうで、今のように「杉並能楽堂」と云われるようになったのは戦後で財団法人になってからのことです。

今能楽は観世、宝生、金春、金剛、喜多の各流のほか、狂言方はこの大蔵流、和泉流の二つがあるそうです。

杉並能楽堂は区内では最古のものですし、自然光の中で能、狂言を鑑賞できる珍しい又貴重な建物です。

和田に移った当時はまだ今よりも規模も若干小さく百名程度の収容人員だったそうですが現在は百五十名から二百名近くの人が入れます。又この建物は桜田門外の事変で有名な彦根藩主大老であった井伊家に残されていた江戸城三の丸図面を基に、橋掛といわれる舞台左手の渡り廊下にいたる迄、昔のままを復元したもので、鏡板という舞台正面の羽目板にえがかれた老松も、正木というお弟子さんの筆になるもので松の緑は緑青を使ったといわれています。舞台右側の地謡座の奥の貴入口、更にその奥の切戸口がありますが貴入口は広く、切戸口は狭く、江戸時代の形を忠実に、再現されていますし、舞台床下には束柱を立てない特殊構造で瓶がうめられ共鳴効果を高めるようになっています。

機会があったら鑑賞してください。